

# ポーとボードレールの交感

浅原義雄

## (一)

世界の文学史上、一国の作家が他国の作家に影響を与えた例として、ポーとボードレールの関係ほどその顕著なケースは他にないと言っても過言ではないだろう。確かに、シェイクスピアやゲーテのごとく汎世界的な規模で各国の著名な作家達に及ぼした影響力を考察すれば、それに関する研究論文はいくらでも机上にうず高く積み重ねられよう。しかしポーとボードレールのケースほどに決定的な要因となつたことは文学上の一種の奇跡にも等しいと言えるだろう。もしポーとボードレールの邂逅がなかったら、はたして「悪の華」の詩人が真の意味で存在しえたであろうか。かつまたマラルメ、ヴァレリーと続くフランス詩人達がポーを崇拜し賞讃し理解した過程において詩人としての榮譽を確立しえたであろうか。だがアメリカ本国でポーはホーンやエマソン等の文学的名声に比して、「フランスにおける彼の詩と詩論の影響は絶対である。しかし英米では、その影響は無きに等しい。

……ポーは第二流のロマン派であり、散文作家としては、いわゆる『ゴシック小説』の後継者、詩においてはバイロンやシェリーの模倣者となされてきたと言っても不当ではないだろう<sup>(1)</sup>という徹底的な酷評かせいぜい二流作家としての評価しか得ていない。そういう意味ではロマン・ロランのフランスでの評価に類似していると言えなくもない。しかし英米の作家や批評家達の完全な無視に近い不当な扱いしかうけていないポーを、いかにフランスの詩人ボードレールが信奉したかは、「毎朝、すべての力、すべての正義の源である神に、そして仲介者として、私の父に、マリエットに、そしてポーに祈りを捧げる<sup>(2)</sup>」という「火箭」の一節が証明している。ボードレールが一八四七年にイザベル・ムーニエ女史の「黒猫」の翻訳を読んで以来、ポーに対する心酔ぶりは、ボードレールの年表をたどれば一目瞭然である。一八四八年、ボードレールが二十七歳の時から一八六五年までの十七年間の彼のポーとのかかわりあいには次のようになる。

一八四八年

「思考の自由」誌に、「催眠術下の啓示」を翻訳。

一八五二年

四月十七日号の「画報」誌に、「ベレニス」を翻訳。

十月号「パリ評論」誌に、「陥穽と振子」、十月号「家庭雑誌」に「室内装飾の哲学」、十月十一日号「画報」誌に、「鋸山奇談」を翻訳。

一八五三年

二月四日号の「パリ・ジュールナル」誌に、「告げ口心臓」

三月一日号「芸術家」誌に、「大鴉」の散文詩、

十一月十三日、十四日号の「パリ」紙に「黒猫」

十四日、十五日号に「モレラ」を翻訳

一八五四年

七月から翌年四月まで、「祖国」誌に、既出の作品を含む、「アイロスとチャーミオンの対話」、「四獣一体」、「言葉の力」、「影」、「アモンテイリヤードの酒樽」、「天邪鬼」、「メッツェンガーシュティン」、「鐘楼の悪魔」、「ヴァルドマール氏の真相」、「ミイラとの論争」、「壘の中の手記」、「モノスとユナの対話」、「ペスト王」、「群集の人」、「楕円形の肖像」、「妖精の島」、「軽気球夢譚」、「リ

ジアア」、「メールシュトレームに吞まれて」、「アッシャー家の崩壊」、「ウィリアム・ウイルソン」、「名士のむれ」、「沈黙」、「赤死病の仮面」、「ちんば蛙」、「モルグ街の殺人」、「盗まれた手紙」、「ハンス・プファールの冒険」の三十七篇を翻訳。

一八五六年

ミシエル・レヴィ兄弟書店から、既訳十二篇に「黄金虫」を加えて、「意想外の物語」初版を出版

一八五七年

ミシエル・レヴィ兄弟書店から、序文に「エドガー・ポーについての新しいノート」を加えて、「新・意想外の物語」を出版。

一八五八年

ミシエル・レヴィ兄弟書店から、「アーサー・ゴードン・ピムの冒険」を出版。

一八五九年

三月十日号の「フランス評論」誌に、「エレオノーラ」同三月二十日号に「イエルサレムの物語」を翻訳、同四月二十日号に、「大鴉」と「詩作の方法」に序文をつけて、「詩の創生」を発表。ジェネーヴの「国際評論」誌に、「ユリイカ」を連載。

一八六二年

「世界画報」誌に、「メールチェルの将棋らし」を翻訳。

一八六五年

一月七日—二十八日号に「世界画報」誌に、「タール博士とフェ  
ザー教授の療法」の翻訳。

三月十六日、ミシエル・レヴィ兄弟書店から、ポアの翻訳集、  
「異様でまじめな物語」を発売。

以上の年表を参照すれば、いかにボードレルがポアに関心をよ  
せ、心血をそそいで翻訳してきたか理解できる。しかしこのことは英  
米の作家にとっては大変に腹立しい怒りにも似た焦燥感を抱かざるを  
えないであろう。それ故、彼等が自分達の評価が正しいという証しを  
なにかに求めなければ腹の虫がおさまらないのは至極当然のことと言  
えるだろう。ポアが英米では重要視されずフランス本国で受け入れら  
れた理由を、T・S・エリオットは、「ところで、まず第一に考慮に  
入れておかなければならぬことは、これから三人のフランス詩人はい  
ずれも英語をよく知らなかったという事実」<sup>(3)</sup>のせいになっている。この  
説を裏付ける例としてボードレルの翻訳上のミスでしばしばやり玉  
にあげられるのが「催眠術家の啓示」の一節である。

“Thus man is individualized. Divested of corporate investiture

he were God.”

“Ainsi l'homme fut individualisé. Depouillé de l'investiture  
corporelle, il était Dieu.”

と訳したことに is (be 動詞現在形) を fut (être 動詞の直接法単純  
過去形) に were (be 動詞の仮定過去形) を était (être 動詞の直説  
法半過去形) としたのは時制上誤りがあるとか、熟語 but for を sans  
にしなればならないのを mais, pour と誤訳したり、sleepwalker を  
sleep-walker の意味の somnambule (夢遊病者) をあてたことを指摘  
して鬼の首でも取ったとく批難し、ボードレルの英語力を疑問視  
している。確かにボードレルの英語の力がどの程度だったかは問題  
になる。彼が英語を学んだのは、少女時代をイギリスですごした母親  
のオーピック夫人からであることは定説である。ボードレルが、ポ  
アを最初に翻訳したのは前述したように一八四八年の「催眠術下の啓  
示」で、次の「ベレニス」を翻訳したのは一八五二年である。この四  
年の間に英語力が向上したことは一八五二年三月二十七日にオーピッ  
ク夫人に宛てた次の手紙で推察できる。

“J'ai trouvé un auteur américain qui a excité en moi une  
incroyable sympathie, et j'ai écrit deux articles sur sa  
vie et ses ouvrages. .... J' avais beaucoup oublié l'  
anglais, ce qui rendait la besogne encore plus difficile.

Mais maintenant, je le sais très bien! Enfin je crois que  
j'ai mené la chose à bon port."

(Baudelaire, "Correspondance", I, Bibliothèque de la Pléiade,  
p. 191~2)

「私は自分の中に信じられないほどの共感を引き起したアメリカのある作家を見出しました。そして私は彼の生涯と彼の作品について二つの記事を書きました。……私は英語をまったく忘れていたのです。そのことが仕事をなおさら困難にしました。しかし今、私は英語が大変良くわかります。ついに私はつつがなく物事を運んだと思います。」(筆者訳、以下同じ)

書簡を鴉呑みにする愚はさげなければならないが、ボードレールが母親に「私は英語が大変に良くわかります」と言う言葉に嘘はないであろう。自分が精魂傾けたポーを理解しようとする為に、ボードレールは英語の研鑽を積んだのである。それ故、重箱の隅をつつくようにボードレールのほんの些細な翻訳のミスをあげて、彼の英語力を問題にするのは、物の本質をみまちがう恐れが多分にある。しかし英米人は天才詩人ボードレールの語学力をうんぬんするのは流石に気が咎めるとみえて、「あまりよく知らない言葉で何かを読む場合、読み手が天才である場合には、幸運な偶然によって、外国語の詩が読み手自

身の精神の深みから何かを汲み出すこともあるだろうが、それを読み手は自分が読んだもののせいにするのである。ポーの散文をフランス語に翻訳するにあたり、ボードレールがみごとに改良をほどこしたこともたしかである。彼はときおりずさんで安っぽいポーの英語をみごとにフランス語に移しかえたのである。」<sup>(4)</sup>とポーの文体の稚拙さをくさしながらボードレールの才能豊かなフランス語を誉め称えるという苦肉の策を考え出す。そして、これだけでは不十分とみえてT・S・エリオットはポーが英米では受け入れられずヨーロッパでもてはやされた理由として、「ポーの作品には、ホイットマンにはほとんどそれがないという意味での、一種の地方性の味わいがある。それは自分が属する場所で自足することができず、それでいてどこにも行けない人種<sup>(5)</sup>がもつ地方性である。ポーはいわば根無し草的ヨーロッパ人なのである」と、ポーのもつヨーロッパ人的感覚を指摘しているが、これはある面ではあたっているだろう。さらに彼は、「問題は、ボードレールがポーに、ポーの人生に、またポーの孤独と世間的な不成功に呪われた詩人、つまり社会からはみだした者としての詩人の原型を見出したことである<sup>(6)</sup>」と述べているが、これはまさしく至言である。そのことは、「意想外の物語」の序文に掲げられた、「エドガー・ポー、その生涯と作品」の冒頭の言葉が証明している。

"Dans ces derniers temps, un malheureux fut amené devant  
nos tribunaux, dont le front était illustré d'un rare et

singulier tatouage : Pas de chance ! ..... Il y a dans l'histoire littéraire, des destinées analogues, de vraies damnations, — des hommes qui portent le mot guignon écrit en caractères mystérieux dans les plis sinueux de leur front."

(Edgar Poe, "Histoires extraordinaires", classique Garnier, p. 3)

「近頃、一人の不運な男が法廷の前に連れてこられた。その額には「運がない」という滅多に見られない奇妙な入墨が施されていた。……文学史の中には、同じような運命の真に神の呪いを受けた人間がいる。——その額の曲りくねったひだの中に、神秘的な文字で書かれた『不運』という言葉をもっている男がいる。」

ボードレールがポーを「真に神の呪いをうけた不運な」人間とみなしているが、それはとりもなおさず彼自身の姿である<sup>(7)</sup>と言えるだろう。要するにポーに対する見方が英米人とフランス人でかくも正反対の評価になるのは、つきるところ英語を母国語としている者と外国語となる者の立場の相違といえるだろう。ポーの小説の構造上の欠陥や、詩の幼稚な語法や不正確なリズムは英語を母国語としている者にはすぐ理解できることだが、フランス人には気がつかないことは多分にありうる。しかし、英米人は英語の語法上の欠陥に眼がいてしま

うあまり、ポーの創作方法をとめると軽視してしまふ感がなきにあらざるである。ボードレールは、ポーの小説上の技法で感銘を受けたことは間違いないのである。そのことは、テオフォーヌ・トレン苑の書簡が物語っている。

"Eh bien ! On m'accuse, moi, d'imiter Edgar Poe ! Savez-vous pourquoi j'ai si patiemment traduit Poe ? Parce qu'il me ressemblait. La première fois qui j'ai ouvert un livre de lui, j'ai vu, avec épouvante et ravissement, non seulement des sujets rêvés par moi, mais des phrases pensées par moi, et écrites par lui vingt ans auparavant," (Baudelaire "Correspondance" II, Bibliothèque de la Pléiade, p. 386)

「ええ、世間の人は私が、エドカー・ポーを模倣していると私を批難します。なぜ私がそんなに辛抱強くポーを翻訳したか貴方はわかりますか。なぜなら彼は私に似ていたのです。最初に私が彼の本を開いた時、私は自分が夢想していた主題ばかりでなく、私が考えていた語句までが二十年も前に彼によって書れていたのを、恐怖心と有頂点の気持で見たのです。」

この言葉に嘘はないことは、ボードレールが他の書簡の中で何度で

もこのことを繰り返し強調しているから確かであろう。小説の主題ばかりでなくボードレールはポーとの間に精神的な血縁性があることをはっきりと自覚する。

“Ce qu'il y a d'assez singulier, et ce qu'il n'est impossible de ne pas remarquer, c'est la ressemblance intime, quoique non positivement accentuée, entre mes poésies propres et celles de cet homme, déduction faite du tempérament et du climat.”

(I bid, I, p. 269)

「かなり奇妙ではあるが、そして私が認めずにはいられないことは、実証的に強調されているわけではないけれど、気質や風土を差引いても、私自身の詩とこの男の詩との間には内面的な類似性がある。」

この「内面的な類似性」という確信があるからこそ、ボードレールは血のにじむような努力を傾けてポーの作品を十数年にわたって翻訳を続けるのである。

## (二)

ここでボードレールの「ポーの翻訳の歴史」とも言へば「意想外の

物語」を上梓するまでの成立過程を追ってみよう。ボードレールが日夜呻吟しながら十数年もポーの作品を翻訳した根拠は前述した通りである。ボードレールがポーを発見した一番の大きな理由は、彼の気質と切り離しては考えられないだろう。元来、彼の性格は人並はずれて物事に熱中する傾向があった。「異常なほどの好奇心」でもって彼は次から次へと「未知の対象物」を求めて渉猟したのである。一時期彼が示したドラクロワ、ゴッティエ、ワグナーへの傾倒は数多くの批評家が指摘するところである。「未知のものに対して奇妙なかわきを覚えて」いる状態の時にボードレールはポーを知ったのである。その間の経緯は、ガルニエ版「エドガー・ポー、意想外の物語」の紹介でルモニエが詳しく述べているので少し長いが引用しておく。

“Baudelaire a fixé lui-même, quelques années plus tard, la date de sa découverte. «En 1846 ou 1847, dit-il, j'eus connaissance de quelques fragments d'Edgar Poe». Et Asselineau, le meilleur ami de Baudelaire, a confirmé ce témoignage; «Edgar Poe lui fut révélé par les traductions de Mme Adèle Meunier qui parurent en 1847 dans la Démocratie Pacifique».

A cette époque, «vivant en plein quartier des écoles, fréquentant les cafés de la rive gauche, très lié avec quelques écrivains et quelques poètes du parti socialiste, le

jeune poète professa pendant quelque temps les idées humanitaires». Il est donc probable qu'il lisait régulièrement la Démocratie Pacifique, et qu'ainsi le premier conte publié par M<sup>me</sup> Meunier ne lui échappa pas. D'autre part, si l'on observe que ce premier conte fut précisément ce Chat Noir qui fit une telle impression sur lui qu'il le savait presque par cœur, il est vraisemblable que l'on ne se trompera pas d'un jour en fixant au janvier 1847 la date où Edgar Poe lui fut révélé."

("Edgar Poe, Histoires extraordinaires", classique Garnier, p. IV~V)

「ボードレールは、自分自身で数年後に彼が発見した日を定めた。『一八四六年か一八四七年に、私はエドガー・ポールのいくつかの断片的な作品を知った。』と彼は言った。そしてボードレールの最良の友アスリノーは次のようにボードレールの証言を立証した。『エドガー・ポーは〈平和民主主義〉誌に発表されたアデル・ムーニエ夫人の翻訳によって彼に知らされたのである。』この時期、『ラテン区の中ですごしたり、左岸のカフェに出入したり、社会主義政党的数人の作家達や詩人達と親交を結んだりして、若き詩人はしばらくの間、人道主義的な思想を公言した。』それ故、多分彼は〈平

和民主主義〉誌を定期的に講読して、ムーニエ夫人によって発表された最初の短編小説を必ず読んだであろう。他方、この最初の短編小説がほとんど暗誦してしまうほどに彼に強い印象を与えたまさにあの『黒猫』であったことを見れば、ボードレールがエドガー・ポーに啓示を受けた日付を一八四七年一月二十七日と決定した日に間違いはないであろう。」

ボードレールがいかにかこの「黒猫」に衝撃を受けたかは、「初めてその本を読んで以来、ボードレールはこの未知の天才に対して感嘆の念に打たれた。……私はこのように完全に、急激に、そして絶対的に心を奪われたことはほとんどいまだかつてなかった<sup>(8)</sup>」と語るアスリーの言葉を待つまでもなく、ボードレール自身が再三再四書簡で述べていることである。では、ボードレールはこの「黒猫」の中に、「内面的な類似性」を感じ、自分が「夢想した主題」ばかりでなく、「考えていた語句」までがポーによって二十年も前に書れていたと判断した根拠はどこにあるのだろうか。それを解く鍵がこの作品の中に隠されていることは間違いないであろう。この作品の荒筋は、幼い頃から気立てがおとなしくやさしい主人公が、彼と同じように温和な女性と結婚して、色々なベットと共に全身まっ黒で美しい大きなブルーとトと言う名の猫を飼う。動物好きの彼も、飲酒癖という悪魔(Friend Intemperance)に魅いられて気質と性格は悪いほうにすっかり変ってしまう。アルコールの勢いから彼は、ペン・ナイフでブルート

一の片方の眼窩をえぐり取った後、「片意地」の精神 (the spirit of perverseness) にかかれて木に吊して殺してしまふ。しかし焼跡の壁に、この黒猫の影が現われて彼は驚きと恐怖心にさらされる。ある夜、彼は酒場で姿形がブルートーに酷似している黒猫を偶然に見つけ、その店の主人から貰い受ける。ある日、妻と共に地下室に行った時、後についてきたその黒猫の為に彼は、危く階段からころげ落ちそうになる。彼は激怒して猫めがけて斧で一撃を加えようとしたが、妻にとめられたので、ついにかつとして彼女の脳天めがけて斧を打ちおろして即死させる。そして妻の死体と猫を地下室の壁に塗りこめてしまふ。ついに警察の自宅搜索を受けた際に、猫の亡霊に精神錯乱をきたした彼は、その壁を杖でたたいて己の犯行を発覚させてしまふ、と以上のごとくであろう。一種の怪奇、幻想小説の形態をとっているがこの小説の中心テーマは、人間が生れながら持っている「片意地の精神」が、アルコール中毒によって拍車がかけられ理性で抑制できず身の破滅を招いた悲劇であろう。アルコール中毒に陥いたこの主人公は、一八四九年に四十歳の若さでボルティモアの投票場の前で倒れ意識不明のまま病院でポーの後年の姿を暗示していると言えよう。罪の意識にさいなまれながらも人間の本能に負け確実に破局に向ってつき進むこの小説の善良な主人公にボードレールが限りない共感を抱いたのは想像に難くない。特に次の箇所は彼の心をうったであろう。

“And then came, as if to my final and irrevocable

overthrow, the spirit of Perverseness. Of thif spirit philosophy takes no account. Yet I am not more sure that my soul lives than I am that perverseness is one of the primitive impulses of the human heart — one of the indivisible primary faculties or sentiments which give direction to the character of Man.”

(“The complete Edgar Allan Poe Tales”, Avenel books, p. 383)

「それから、まるで私の最後の取り返しのない破滅を招くかのように、『片意地』の精神がやってきた。この精神について、哲学は無視している。だが、私は己の靈魂が生きていると確信するのと同じように、この片意志は人間の心の本能的衝動の一つ、すなわち人間の性格を方向づける不可分の原始的な能力あるいは感情の一つであると確信している。」

そういう意味では、「ポーが〈天邪鬼〉と定義したもの、すなわち確実な自己敗北に到る行動をとらしめる人間の生来の本能、これこそボードレールが自らの行動の類型の中にすぐに認めた特徴だった。この宿命的なものが彼の生活をかたわにしたので『黒猫』の主人公が真先に立って自らの破滅を企てた様子をみた時、ポートルールがその主人公の中の同じ現象にすぐ反応したというのは驚くにあたらず。」<sup>(9)</sup>



言うパトリックF・クウインの指摘はまさしく正鵠を得ている。ボードレールは、自分の思想があますことなくこの「黒猫」の中に具現されていると認識し、ポーを自分の分身とみなしたからこそ、彼の思想をさらに追求すべく他の作品を手当りしたい求め、ついにポーが編集した「南部文学通信」の綴じ込みまで読みあさったのである。その結果、ボードレールのその後の文学的方向をも決定してしまうのである。「もし彼が精神の好奇心から、エドガー・ポーの著作のうち、新しい知的世界を発見する幸運を得られなかったならば、恐らく彼をゴーチェの一好敵手とか、高踏派の一妙手ぐらいにしかしなかったのでありましょう。明晰の魔、分析の天才、また、論理と想像、神秘性と計算との最も斬新で最も心を惹く結合の発明者、例外の心理家、芸術のあらゆる資源を窮め利用する文学技師、これらはエドガー・ポーの姿をとって彼の前に現われ、彼を驚嘆させます。これほど多くの独創的見解と異常な約束とは、彼を魅了します。彼の才能はこれによって変容され、彼の運命は華々しく一変されます」と言ったヴァレリーの言葉はボードレールとポーの関係の本質を鋭くえぐった名言と言えよう。事実、ボードレールは「黒猫」に出会った後、ポーの作品を十七年間にわたって千五百ページも翻訳し、クレペ版ボードレール全集の十二巻のうち五巻がポーの作品で占められる偉業となるのである。

### (三)

ここでボードレールの生存中に五版も重ねて、彼の生涯で最も評価

された決定稿「エドガー・ポー、その生涯と作品」の構成をみてみよう。総ページ数はガルニエ版で二十三枚である。全体は四章に分けられている。冒頭のエピグラフにエドガー・ポーの「大鴉」とテオフィル・ゴーチェの「闇」の詩の一節がかかかれているが、この二編の詩は初稿では掲載されていない。それぞれの引用詩に、「Fatalité」（宿命）と「Destin」（運命）という言葉をもってきてポーの人生を暗示させ、第一章で「Pas de chance !」（運がない）と「Guignon」（不運）とイタリック体で強調してポーの人生そのものの不運を嘆く。さらにエピグラフにかかげたテオフィル・ゴーチェの「闇」の一節を引用して「Car ils doivent périr inévitablement.」（「なぜなら彼等は必然的に非業の死をとげなければならない。」）とポーがいくらか才能や美德や優邪さを示しても社会に受け入れられなかったと断定する。

「Lamentable tragédie que la vie d'Edgar Poe !」（「エドガー・ポーの生涯はなんと痛ましい非劇か！」）という言葉はボードレールのポーに対する哀悼の辞である。そしてボードレールはポーの天才を理解しようもせずにブルジョアの偽善で彼を侮辱しその屍に鞭打った人々を断罪する。特にポーの知人であったグリズウォールドとウイリスの二人を善意にみちた論文で彼を誹謗したかどで独善的な吸血鬼と痛罵する。このグリズウォールドへの激怒は初稿ではみられないところである。ここで一転して産業の全能を信じその物質的發展を誇ながらも旧大陸を嫉妬する巨大で子供じみたアメリカ合衆国に批難の鋒先を向る。貴族の血統をもたない成金趣味のアメリカにおいては、不動のもの

の、永遠のもの、不変のものだけを信じたポーは特別に孤独な頭腦の持ち主であったと称讃する。しかし、「l'infortuné」（薄幸な）男ポーにとっては人生は地獄となり天寿をまっとうできないものも当然であるろうとボードレルは判断して第一章を終る。「Fatalité, Destin, Pas de chance, guignon, périr, lamentable tragédie, infortuné」とポーの人生を象徴してボードレルが詩人の感性でもつてたまたみかける手法は美事と言えよう。

第二章でボードレルはポーの不幸な生い立ちを述べる。高名な將軍の息子ディヴィッド・ポーが美貌の英国の女優エリザベス・アーンルドと墮落も同然に一緒になった結果生まれたのがエドガー・ポーである。ポーの父母は旅回りの役者として貧窮のうちにあいついで亡くなり、ポーは幼くして天涯孤独の身となった。ボードレルはポーの出生からすでに彼の波瀾万丈の人生を予告しているとみなす。

—Si jamais l'esprit de Roman, pour me servir d'une expression de notre poète, a présidé à une naissance—  
esprit sinistre et orageux ! — Certes, il présida à la sienne.  
Poe fut véritablement l'enfant de la passion et de l'aventure. ”

(“Edgar Poe, Histoires extraordinaires”, classique Garnier, p. 8~9)

「——我が詩人の表現を利用すれば、もしかだかつてロマン

の精神がある出生を支配したとすれば、——不吉で波瀾に富んだ精神よ！——たしかにそれは彼の出生を支配した。ポーは真に情熱と冒険の子であった。」

ボードレルはポーが富裕な商人アラン氏の養子となった経緯、学生時代、陸軍士官学校時代、養父母との仲違いの事情等を順次述記していく。そして彼の処女詩集を次のように最大限に評価する。

“Peu de temps après avoir quitté Richmond, Poe publia un petit volume de poésies ; c'était en vérité une aurore éclatante. Pour qui sait sentir la poésie anglaise, il y a là déjà l'accent extra-terrestre, le calme dans la mélancolie, la solennité délicate, l'expérience précoce, — j'allais, je crois, dire expérience innée, — qui caractérisent les grands poètes.”  
(Ibid, p. 9)

「リッチモンドを去ってしばらくして、ポーは小さな詩集を出版した。それは實際輝かしい曙であった。英詩を感得できる人にとって、そこにはすでに、大詩人を特徴づける地上外の調子、憂愁の中の静けさ、えも言われぬ荘重さ、早熟な体験、——私は天賦の体験と言べきだと信じるが——があっ

た。」

さらにポードレルは、ポーの「南部文学通信」の編集長時代の活躍、魅力的で気立のやさしい少女との結婚、短篇小説の発表、「ユリイカ」の講演、アルコール中毒症の震顛譫妄の最初の発作と彼の半生を語っていく。そしてポーの悲惨な死を次のように述べる。

“Ainsi disparut de ce monde un des plus grands héros littéraires, l'homme de génie qui avait écrit dans le Chat Noir ces mots fatidiques: Quelle maladie est comparable à l'alcool!”

(Ibid, p. 12)

『『どんな病気がアルコールに比べられるか!』と『黒猫』の中で、予言的な言葉を書いた文学上の偉大な英雄の一人である天才がかくしてこの世から姿を消した。』

ポードレルは、かつて「黒猫」を読んだ時に、すでにポーの悲劇的な最後をすでに予感していたからこそ、このようなクレイムを奏するのである。さらに第三章の掉尾を飾るクレム夫人の引用の手紙は興味深い。

“Mais dites bien quel fils affectueux il était pour moi, sa pauvre mère désolée ……”

(Ibid, p. 15)

「けれども悲歎に暮れた哀れな母である私にとって、彼がいかに愛情の深い息子であったかをよく言って下さい。」

この一節は、まさしくポードレルの母親オービック夫人に対する屈折した彼の裏返し of 真情がこめられていることは確かである。

第二章全体を通じてポードレルのポーの半生を語るくたりは、四十歳以上も年令差のある両親に生れた自己の境遇とをだぶらせて感情移入がはなはだしいと言えよう。

第三章はポーの人間の魅力を証明する為に、ポーの女友達フランシス・オズグット夫人の手紙を長く引用している。しかしこの章で特に注目すべきは次の箇所である。

“Je crois que, dans beaucoup de cas, non pas certainement dans tous, l'ivrognerie de Poe était un moyen mnémorique, une méthode de travail, méthode énergique et mortelle, mais appropriée à sa nature passionnée.”

(Ibid, p. 22)

「確かにすべてにおいてではないが、多くの場合において、ポアの飲酒癖は記憶の手段、仕事の方法、精力的で致命的な、しかも彼の情熱的な性質に適した方法であったと私は思う。」

ポアの飲酒癖に対するこの見解は初稿に載っていない。

第四章は、ポアの作品についてのボードレルの簡潔ではあるが鋭く的確な判断が述べられている。彼は、ポアの詩を「深くもの悲しい水晶のように透明で正確」であると感嘆し、その「美事な文体」も称讃するが、ポアの作家としての本質を次のようにとらえる。

“Poe est l'écrivain des nerfs, et même de quelque chose de plus, — et le meilleur que je connaisse.”

(Ibid, p. 23)

「ポアは神経の作家であり、なにかそれ以上のものさえもっており、そして私が知る最上の作家である。」

ボードレルがポアのなかにみたのはまさしく「神経の作家」だったのである。

#### (四)

ポアがボードレルという最大の仲介者に出会ったのは幸運であつたといふべきであらう。もしボードレルというたぐいまれな信奉者が、この世にポアを紹介しなかったら、ポアは文学上の栄光をかちえることもなく忘却の淵に沈められてしまったかもしれない。

ポアは同国人でなくフランス人の中に卓越した最高の文学的保護者をもつた幸福を喜ばなければならぬであらう。しかしこの二人の関係はボードレルがポアにひたすら献身したという一方的なものではなく、ポアがボードレルに奇与した貢献も忘れてはならない。「ボードレル、エドガー・ポアは価値を交換するということ。二人はお互いの相手の持つものを与え、自分の持たぬものを貰います。ポアはボードレルに斬新深奥な思想の一体系をそっくり引き渡します。これを啓発し、豊饒にし、多くの題目についての彼の意見を決定します。

詩作の哲理、人工的なものの理論、近体的なものの理解と否定、例外的なものとなる種の奇異さの重要性、貴族的態度、神秘性、優雅と明確の趣味、政見すらも……。全ボードレルは彼に渗透され、靈感され、深められます。しかしこれらの財宝と引きかえに、ボードレルはポアの思想に、無限の広袤を得させます。彼はこれを未来に提出します<sup>(4)</sup>。と言うヴァレリーの言葉は古さを感じさせぬ時代を越えた名言であらう。ボードレルはポアへの無私の献身の代償として、模索し苦闘していた己れの進べき文学の道への啓示を与えられ、そして彼

の象徴主義はマラルノの詩、ヴァレリーの詩論へと受けつがれるのである。そういう意味で、ポーとボードレールの交感は文学史上画期的な出来事であったと重ねて強調しておこう。

- 注(1) T・S・エリオット「ポーからヴァレリーへ」、八木敏雄訳(冬樹社、一〇五―七頁)。
- (2) Baudelaire, *oeuvres posthumes*, mercure, 1908, p. 135.
- (3) T・S・エリオット「ポーからヴァレリーへ」、八木敏雄訳(冬樹社)、一一五頁。
- (4) 同前。
- (5) 前掲書一〇七頁。
- (6) 前掲書一一六頁。
- (7) ボードレールは一八六五年十二月二十三日の母宛の手紙で、自分の「不運」を嘆じている。
- “Relativement au guignon dont je me plains (et dont je me vengerai si je peux), je ne puis pas, ma chère petite mère, être de ton avis, malgré toute ma déférence pour toi.” (Baudelaire, “Correspondance”, II, Bibliothèque de la Pléiade, p. 552)
- (8) “Edgar Poe, Histoires extraordinaires”, (Classique Garnier, p. IV)
- (9) パトリック・F・クワイン「ポーとフランス」、中村融訳(審美社)、七五頁。
- (10) ヴァレリー全集「七」、「ボードレールの位置」、佐藤正彰訳(筑摩書房)、二一九―二〇頁。
- (11) 前掲書二二八―九頁。